海外の大学から見た国際交流の現状と問題点＜韓国編＞
―仁濟大学校[1] 日語日文学科の取り組みを中心に―

園田　博文
（日本語学・日本語教育学）

全　成　燁
（日本語学）

国実　久美子
（日本語教育学）

百留　康晴
（日本語学）

百留　恵美子
（日本語学）

【キーワード】大学用語、日韓中台語彙対照研究、大学間協定校、国際交流、日本語教育

1　はじめに

共同執筆を行った５名は、日本語学（日本語史・現代語）および日本語教育学の研究者であり、基礎的な分野の研究を並行して行いながら、応用分野である日本語教育の研究と教育実践に取り組んでいる。

今回は国際交流をテーマにしたが、これは広い意味での日本語教育の一分野として捉えることが出来る。海外派遣留学制度を日本国内の大学の視点から論じた新倉（2000）[2]のような先行研究はあるが、海外からの視点で論じたものはあまり見られない。今後、ますます大学間の国際交流は進むと考えられるが、国際交流の発展に伴い生じる様々な問題点についても目を向けていかなければならない。本稿では、まず、漢字圏である日本・韓国・中国・台湾の大学用語について、同じ漢字表記を使いながらも制度などの違いから意味範囲が異なり生

1）韓国の正字は康熙字典体（旧字体）であるが、現在はハングルによって表記される場合が多い。本稿では、韓国語の漢字表記については大学用語の日韓中台語彙対照表、および、康熙字典体（旧字体）を用いた方が効果的である場合を除き、日本の新字体を用いた。なお、大学名の「仁濟」に関しては固有名詞であるため、康熙字典体（旧字体）を用いた。
2）新倉涼子（2000）「海外派遣留学制度の学内運用システム構築の試み」『留学生交流・指導研究』（国立大学留学生指導研究協議会）Volume 3

る問題点を指摘した後、山形大学の大学間協定校[3]である仁濟大学校[4]の側から見た日本の大学との国際交流について概観し、その現状と問題点を明らかにしたい。

2　大学用語と単位換算・成績認定について

2．1　大学用語の日韓中台語彙対照研究の試み

日本、韓国、中国、台湾は漢字圏の国（地域）であり、大学用語も通時的に見ると、国家間の影響関係、各国内部での意味・用法の変化が認められ、大変興味深いが、本稿では、共時的な点のみに着目する。中国と台湾の場合は別として、それぞれ言語が異なるので、体系としての語彙も異なっていて当然なのであるが、同じく漢字[5]で表記する（あるいは、できる）ため、様々な誤解が生じる。実際に経験した例としては、協定締結のため仁濟大学校人文社会科学大学の「學長」（韓国語）が山形大学に訪問されたとき、掲示には「學長」と表記したが、一部の教職員は「学部長」ではなく「学長」だと誤解し、また、誤解していることに気づいていなかったであろう。困った例としては、中国や台湾から日本語で「研究生」になりたいという E メールでの問い合わせがあったときである。非正規生である日本語の「研究生」制度をきちんと理解していて「研究生」と使っているのか、「大学院生」をイメージしているのか、二、三度メールのやりとりをしても分からなかった事例もある。また、漢字表記とは関わらないが、あるとき年間 30 コマ取らないとならないといって慌てていた留学生がいたが、実際は 30 単位（1コマ2単位の授業と1単位の授業があるので、17 コマ程度になる）であることが分かり、安堵したということもあった。学校教育法改正後、日本では従来の「助手」の職が「助教」と「助手」に分けられ、学生の教授指導と研究を中心に行う「助教」という新しい職階が設けられた。韓国の大学にも「助教」という職階があるが、事務を中心とした業務を行っており、学校教育法改正後の日本の「助手」と仕事内容が近い。同じ漢字語を使うことにより、日本の「助教」と韓国の「助教」を同じ身分だと捉えてしまうと、大きな誤解が生じることになる。

国際交流にかかわる大学用語使用の際の問題点を探るため、授業に関わるもの（【表 1】）、教育機関・教育課程に関わるもの（【表 2】）、職階・身分に関わるもの（【表 3】）に分けて

3）2005 年 8 月 24 日、第一筆者が地域教育文化学部の窓口教員（現全学副コーディネーター）、第二筆者が人文社会科学大学の窓口教員として、学部間協定が結ばれ、後に、大学間協定に昇格した経緯がある。これまでに、仁濟大学校から 5 名、山形大学から 1 名の学生が交換留学生として学んでいる。
4）http://www.inje.ac.kr/
5）字体の違いはある。

【表 1】授業に関わるもの

日本	韓国	中国	台湾
単位	學點(학점)	学分	學分
コマ[6)](90 分＝２時間の授業のこと)	－	(節・堂)	(節・堂)
～校時[6)]	～校時(～교시)	学時・課時	(節・堂)
シラバス	教育課程(교육과정) 授業計劃書(수업계획서)	教学綱要・ 指導要綱	教學綱要 教學進度
課題研究（３年生用）	－	－	－
卒業研究	卒業論文(졸업논문)	畢業課題	畢業專題

【表 2】教育機関・教育課程に関わるもの

日本	韓国	中国	台湾
大学院	大學院(대학원)	研究生院	研究所
博士課程	博士課程(박사과정)	博士課程	研究所博士班
修士課程	碩士課程(석사과정)	碩士課程	研究所碩士班
大学	大學校(대학교)	大学	大學
学部	大學(대학)	学院	學院
学科	學部・學科(학부･학과)	専業、系	系
コース	課程(과정)	課程	課程
研究所	研究所(연구소)	研究中心・ 研究院	研究中心・ 研究院
大学卒業	大學校卒業 (대학교졸업)	大学畢業	大学畢業
修士課程修了	碩士課程卒業 (석사과정졸업)	碩士畢業	碩士畢業
博士課程修了 (＝学位取得)	博士課程卒業(박사과정졸업)（＝学位取得)	博士畢業	博士畢業
博士課程単位取得満期退学 (＝学位未取得)	博士課程修了(박사과정수료)（＝学位未取得)	博士課程結業	博士課程修畢 (博士候選人[7)])

6）山形大学では 1・2 校時が 1 コマ目、9・10 校時が 5 コマ目に相当する。韓国や台湾では 1 つの科目につき 50 分授業が 2 つから 3 つというのが基本的単位になっており、日本のコマに相当する概念がないため翻訳は難しい。
7）台湾では学位を取得する際にその資格を問う試験が行われる。その試験に合格し、学位を取得する資格を有する者という意味で「〇〇大學博士候選人」という学歴表示の方法も使用されている。

【表 3】職階・身分に関わるもの

日本	韓国	中国	台湾
学長・総長	総長(총장)	校長	校長
学部長	學長(학장)	院長	院長
名誉教授	名譽教授(명예교수)	名誉教授	榮譽教授
客員教授	客員教授(객원교수)	客座教授	客座教授
教授	教授(교수)	教授	教授
准教授	副教授(부교수)	副教授	副教授
－	助教授(조교수)	－	助理教授
講師・専任講師	專任講師(전임강사)	講師	講師
助教（授業担当可）・助手（事務系列）	助教(조교)（事務系列）	助教・助理	助教・(授業担当不可)・助理（事務系列）
非常勤講師	時間講師・外來講師(시간강사・외래강사)	外聘講師	兼任講師
大学院生	大學院生(대학원생)	研究生	研究生
研究生	－	－	－
学部生	學部生(학부생)	大学生	大學生

例示した。詳細については、稿を改めて論じたい。表に示すに当たっては、たとえば「学部・学科」にしても日本の大学すべてに当てはまるわけではなく、「学群・学類」を置いている大学もあるが、一般的な名称を選んだ。

2．2　交換留学生の単位換算・成績認定について　（仁濟大学校と日本の大学）

韓国の大学では、学習量を計る基準として学点を用いる。韓国の「高等教育法」の「学点認定に関する法律施行令」および、仁濟大学校学則による規定は、以下の（1）、（2）の通りである。

（1）「講義の時間は 50 分（実験・実習・実技の場合には 100 分）を 1 単位とし、15 単位を履修した場合に 1 学点とする」（学点認定などに関する法律施行令［一部改定 2007.4.4 大統領令　第 19984 号］による）
（2）「学則第 13 章第 39 条①教科履修単位は学点とする。学点は普通講義の場合は、1 学期 15 時間以上の講義を 1 学点とし、実験、実習、実技、体育科目など特殊講義の場合は 1 学期 30 時間以上の講義を 1 学点とする」（仁濟大学校学則による）
※「学点認定などに関する法律施行令」および「仁濟大学校学則」は筆者による翻訳

施行令から分かるように、50 分が 1 単位で、15 単位が 1 学点となる。われわれ教えるほうの現場感覚で言うと、50 分が「1 時間（休憩の 10 分を含む）」で、15 時間であると 1 学点、30 時間だと 2 学点、45 時間は 3 学点の授業になるわけである。例えば、仁濟大学校日語日文学科の専攻選択科目の一つである「日本語学の世界」という科目は 3 学点の科目で、1 学期 15 週、週 3 時間（50 分の授業が週 3 回）、計 45 時間で授業を行っている。また、普通 1～3 年生の学生一人が 1 学期で履修できる学点は 18 学点以上で、21 学点を越えることはできない[8)]。

なお、仁濟大学校を卒業するには、総計 140 学点以上を修得しなければならない。そのうち、教養必修科目 32 学点、専攻科目は 70 学点以上を必ず履修が必要である。残りは自由選択科目で補う。

次に交換留学生の単位換算や成績認定について述べたい。従来は交換留学生が修得した成績の成績表に基づいて学科の判断で日本の大学の「単位」から韓国の「学点」に換算し、評点を参考にしながら評価をつけ、それを大学本部の教務に提出するとほぼそのとおり、当該交換留学生の学点や成績が認められた、というのが実状であった。しかし、国際交流が拡大されるにつれて、不都合が出はじめた。欧米やアジア諸国はいうまでもなく、日本の大学に限ってみてもその成績表に示される評価と評点の付け方が仁濟大学校とは少しずつ異なるためである（【表 4】参照）。また、次のような問題点もあった。日本の大学の場合、2 単位や 1 単位の科目が多いが、韓国は 1 学点の科目はほとんどなく、主に 2 学点と 3 学点の科目が多い。とくに 3 学点の科目を単位換算する場合には、留学先の大学で修得した科目を二つ当てなければならなかった。それで、仁濟大学校では最近、大学本部の教務処と対外交流処、そして関連学科の学科長が協議し、従来の交換留学生の成績認定方式をやめ、それを「PASS 学点」に変更することにした。例えば、日本への交換留学の場合、評価や評点にかかわらず、交換留学生が留学先の大学で修得した「単位」数がそのままこちらの評価を付与しない「PASS 学点」として認められることになる。これは 2007 年度派遣の交換留学生から適用することになっている。なお、交換留学生は、日本で 18 単位以上を履修することが望ましい。また、単位の認定の際には、類似した科目である必要があるため、注意が必要である。

8）4 年生は別途の規定。複数専攻などの場合は最大 23 学点まで履修できる。

【表 4】各校の成績評価と評点の関係

<table>
<tr><th colspan="2">仁濟大学校</th><th colspan="2">山形大学</th><th colspan="2">茨城大学</th><th colspan="2">比治山大学</th><th colspan="4">福岡女学院大学</th></tr>
<tr><th rowspan="2">評価</th><th rowspan="2">評点</th><th rowspan="2">評価</th><th rowspan="2">評点</th><th rowspan="2">評価</th><th rowspan="2">評点</th><th rowspan="2">評価</th><th rowspan="2">評点</th><th colspan="2">2002 年度
以前</th><th colspan="2">2003 年度
以降</th></tr>
<tr><th>評価</th><th>評点</th><th>評価</th><th>評点</th></tr>
<tr><td>A+</td><td>95～
100</td><td rowspan="2">S</td><td rowspan="2">90～100</td><td rowspan="2">A+</td><td rowspan="2">90～100</td><td rowspan="2">S</td><td rowspan="2">90～
100</td><td rowspan="4">A</td><td rowspan="4">80～
100</td><td rowspan="2">AA</td><td rowspan="2">90～
100</td></tr>
<tr><td>A</td><td>90～94</td></tr>
<tr><td>B+</td><td>85～89</td><td rowspan="2">A</td><td rowspan="2">80～89</td><td rowspan="2">A</td><td rowspan="2">80～89</td><td rowspan="2">A</td><td rowspan="2">80～89</td><td rowspan="2">A</td><td rowspan="2">80～
89</td></tr>
<tr><td>B</td><td>80～84</td></tr>
<tr><td>C+</td><td>75～79</td><td rowspan="2">B</td><td rowspan="2">70～79</td><td rowspan="2">B</td><td rowspan="2">70～79</td><td rowspan="2">B</td><td rowspan="2">70～79</td><td rowspan="2">B</td><td rowspan="2">70～
79</td><td rowspan="2">B</td><td rowspan="2">70～
79</td></tr>
<tr><td>C</td><td>70～74</td></tr>
<tr><td>D+</td><td>65～69</td><td rowspan="2">C</td><td rowspan="2">60～69</td><td rowspan="2">C</td><td rowspan="2">60～69</td><td rowspan="2">C</td><td rowspan="2">60～69</td><td rowspan="2">C</td><td rowspan="2">60～
69</td><td rowspan="2">C</td><td rowspan="2">60～
69</td></tr>
<tr><td>D</td><td>60～64</td></tr>
<tr><td>F</td><td>0 ～59</td><td>F</td><td>0～59</td><td>D</td><td>50～59</td><td>D
(failure)</td><td>0～59</td><td>D</td><td>0～59</td><td>D</td><td>0～
59</td></tr>
<tr><td>—</td><td>—</td><td>—</td><td>—</td><td>—</td><td>—</td><td>—</td><td>—</td><td>F</td><td>失格</td><td>F</td><td>失格</td></tr>
</table>

※仁濟大学校の交換留学生が留学先で取得した成績表に基づく。

3　仁濟大学校日語日文学科の国際交流への取り組み

3．1　仁濟大学校について

まず、仁濟大学校が位置する慶尚南道金海市から紹介する。金海市は、韓半島の東南端、韓国第 2 の都市である釜山広域市の西に隣接している。緯度上では、金海、釜山、東京、LA、そしてアテネがほぼ同じ位置にある。金海市は古代加耶国の一つ、金官加耶国の古都でもある。漢江とともに韓国を代表する大河「洛東江」、韓国有数の名山「神魚山」など、豊かな自然と温暖な気候に恵まれた地である。農業が盛んで、米と花卉園芸は全国有数の質と生産量を誇っているが、同時に、韓国で 2 番目に中小企業の多い都市でもある。最近人口が急増、高層アパートが建ち並んで都市化が顕著であるが、その一方で、金海国立博物館、古墳博物館、「加耶の森」作りなど、古都としての保全整備も十分になされ、新旧が調和した魅力ある、住みやすい都市として知られている。人口は 42 万くらいで、現在慶尚南道の中核都市・教育都市として発展している。

仁濟大学校は、韓国初の民立公益法人である白病院を母体として創立された。白病院の歴史は、学校法人仁濟学園の理事長白樂皖博士の伯父、当時京城医学専門学校（現ソウル大学

医学部）の外科主任教授だった白麟濟博士が、1932 年、現在のソウル白病院の位置に外科病院を開設したことから始まる。1972 年 3 月に総合病院ソウル白病院が開院し、1979 年１月に学校法人仁濟学園および仁濟医科大学が設立された。

仁濟大学校の建学理念は、仁術をもって世を救濟するという「仁術済世」と、仁と徳をもって世を救済する「仁徳済世」である。仁濟大学校は、この建学理念に基づき、人間が基本的に身につけるべき「正直・誠実・勤勉」を校訓に掲げ、「自然保護・生命尊重・人間愛」を大事にする教育を実践している。

【表 5】仁濟大学校の現況（2007 年 3 月 1 日現在）

６つの大学付属病院	６つの単科大学　（４３の学部・学科）	大学院
・ソウル白病院 ・釜山白病院 ・一山白病院 ・上渓白病院 ・東莱白病院 ・海雲台白病院（建設中）	・医科大学　（医予科など　３） ・医生命工学大学　（医用工学科など　７） ・人文社会科学大学（韓国学部など　１７） ・自然科学大学　（環境工学部など　５） ・工科大学　（機械自動車工学部など　９） ・デザイン大学　（デザイン学部　１） ・音楽学科　１	・一般大学院 （３５の修士課程、 ２３の博士課程） ・特殊大学院 （保健大学院） （経営大学院） （教育大学院） （社会福祉大学院）
学部在籍者数 14,387 名、大学院在籍者数 1,472 名、教職員数 1,210 名		

仁濟大学校は、教育人的資源部や各種マスコミ等が実施した外部大学評価においても上位に選ばれ、名門私学として社会からも高い評価を受けている（教育人的資源部第 2 次 BK21〈Brain Korea〉事業 6 つの事業団選定〈2006〉・中央日報大学総合評価優秀大学選定〈1997-2006〉）。

次に、仁濟大学校の国際交流の活動について述べる。仁濟大学校は、1994 年のアメリカのメリーランド大学との交流協定締結を始めとして、全世界の 13 ヶ国、77 ヶ所の大学および研究機関と学術交流を締結し、共同研究、交換留学、語学・専攻研修など、多様な学術交流制度を設け、国際感覚を養うグローバル教育を行うとともに、学問研究の道を開いている。2004 年にはグローバルネットワーク経営の方針を打ち出し、これまで交流のあるアメリカ・中国・日本だけでなく、イギリス・ベトナム・モンゴル・スウェーデンなど交流先を拡大し、国際交流を強化している。現在、これらの協定機関と年間約 300 名の学生が知識と情報を共有し合い、文化と生活を体験している。

【表 6】2007 年度の外国人留学生受け入れ状況

学部		大学院	
（国家・人数）		（国家・人数）	
中国	39	中国	44
日本	3	モンゴル	14
台湾	2	ベトナム	8
アメリカ	2	フィリピン	3
スウェーデン	2	キリギスタン	2
モンゴル	1	日本	1

【表 7】過去 3 年間に海外派遣した学部生数

	交換留学	専攻研修	語学研修
2004 年度	20	59	59
2005 年度	52	61	53
2006 年度	71	126	115

3．2　交換留学および専攻研修、教育実習にかかわる国際交流

3．2では、仁濟大学校日語日文学科（以下、日語日文学科）がどのような国際交流を行っているかを中心に述べる。

まず、現地（日本）での日本語習得、文化理解のために行っている活動としては、交換留学と専攻研修がある。日語日文学科は、3 年間を仁濟大学校で学び、1年間を日本の大学で学ぶという「3+1 制度」を推進している。2007 年 9 月現在、日本語・日本文化を学ぶために派遣が可能な大学は山形大学、茨城大学、比治山大学（広島）、福岡女学院大学、別府大学の 5 校あり、各大学に年間 1～5 名の学生を送っている。留学期間は半年から 1 年、2～3 年生が中心で、日本語学科だけでなく、他専攻の学生の留学も可能である。交換留学生の選抜は、大学における成績と日本語の面接によって行っている。過去 3 年間の仁濟大学校から交換留学した学生数と派遣先を【表 8】に示す。

【表 8】日本の大学への交換留学生の派遣時期と人数

年度	人数	内訳	
2005 年度	5 名	1 学期	比治山 2 名
		2 学期	茨城 3 名
2006 年度	11 名	1 学期	山形 2 名、茨城 2 名、比治山 3 名、福岡女学院 1 名
		2 学期	茨城 3 名
2007 年度	14 名	1 学期	山形 3 名、茨城 3 名、比治山 3 名、福岡女学院 2 名
		2 学期	茨城 2 名、別府 1 名

一方、日本の大学から仁濟大学校に交換留学した日本人留学生の数は【表 9】の通りである。

【表 9】日本の大学からの交換留学生の受け入れ時期と人数

年度	人数	内訳	
2005 年度	1 名	1 学期	比治山 1 名
2006 年度	4 名	1 学期	茨城 1 名、福岡女学院 1 名、大学院生 1 名
		2 学期	茨城 1 名
2007 年度	4 名	1 学期	山形 1 名
		2 学期	比治山 3 名

【表 8】と【表 9】からもわかるように、仁濟大学校から日本の大学への交換留学生は 5 つの大学との協定により、年間約 10～14 名の派遣が可能となった。しかし、仁濟大学校への交換留学生は 5 名弱と派遣人数と受け入れ人数の不均衡が続いている。また、仁濟大学校の学生が留学期間として 1 年を選ぶのに対し、日本からの交換留学生は就職活動などを考慮し、半年の留学期間を選ぶ者が多いという違いもある。これは、日語日文学科の学生が日本語を専門として勉強しているのに対して、協定校から来る日本人の交換留学生は韓国語専攻ではないことが原因として考えられる。仁濟大学校は韓国語教育プログラムを整えつつあるが、全世界からの留学生に対応するため、英語で教えられる科目もあり、英語を苦手とする学生は困難に感じるという問題もある。

次に、専攻研修について述べる。専攻研修は、財団法人ひろしま国際センターで毎年 1 月下旬から 2 月の中旬にかけて 4 週間程度行われている[9)]。この研修は、体験型の学習を通じて、生きた日本語を学ぶとともに、その後の日本語学習へ目的意識を高めることを目的として行われ、大学から補助金も支給される。研修内容は大きく 4 つのセクションにわかれる。まず、第一のセクションは、「交流セクション」で、日本人大学生とともに東広島市と広島市の見学を計画し、探索するというものである。日本人と交流しながら観光するだけでなく、バスや電車の乗り方など、日本で生活する際に必要な知識も身に付ける。第二のセクションは「ビジネスセクション」である。事前準備として、ビジネスマナーや質問のしかたなどを学んだ後、広島県の企業を訪問してインタビューを行い、就職に対する意識を高める。第三のセクションは、「文化体験セクション」であり、高校を訪問し高校生活を体験するとともに、韓国の文化紹介も行う。また、ホームステイも行い、日本人の日常生活についても見識を深める。第四のセクションは「まとめセクション」であり、東広島市・広島市の探索、企業訪問、高校訪問などで体験したことや感想をまとめて発表する。発表には、担当教員を始め、日本語教員や職員なども参加し、本格的な質疑応答も行われる。発表の様子は全てビデオカメラ

9）財団法人ひろしま国際センター（2007）『海外大学日本語・日本文化体験プログラム 韓国仁濟大学校実績報告書』参照

で撮影され、後日録画したものを全員で見て、担当教員が一人一人フィードバックを行う。誤用などに気づき、自分の日本語の実力を知るとともに、口頭発表の技術を明示的に学ぶ。専攻研修は本来、3～4 年生の上級者を対象にしたものであったが、最近では 1 年生や副専攻の学生も参加するようになってきており、研修の 4 つの柱は保持しつつも、研修に向けての動機付けの強化などが必要となってきている。

【表 10】専攻研修の参加人数

2004 年度	2005 年度	2006 年度
7 名	5 名	10 名

次に、日本語教育実習にかかわる国際交流について述べる。日語日文学科は 2006 年度から比治山大学の教育実習を受け入れている。教育実習は毎年9月に4週間程度行われている。また、2006 年 3 月には広島大学の教育実習も受け入れた。教育実習生が滞在している間行った交流行事としては、キャンパスツアー、金海・釜山ツアー、文化紹介などがある。キャンパスツアーは、教育実習生 1 名と日語日文学科の学生（2 年生を中心）2～3 名がグループになり、45 分～1 時間ぐらいをかけて仁濟大学の構内をまわるというものである。食堂や売店の位置など、教育実習生に生活に必要な情報を提供するとともに、日語日文学科の学生と交流をしてもらう目的で行っている。金海・釜山ツアーは教育実習生 2～3 名と日語日文学科の学生（3 年生を中心）に金海や釜山の主要観光地をまわるというものである。日語日文学科の学生は自分の地元を紹介することができ、教育実習生は一般の観光ツアーとは一味違った学生の視点で計画された観光が楽しめる。このような活動は授業と連携させ、綿密に準備・計画することが望ましいが、2 学期の授業開講から 1 週間ほどで教育実習が始まるので、授業時間を使って準備するのは難しいのが現状であり、授業の評価とは全く関係のない活動となる。2006 年度の文化紹介は、調理実習室を借りてのお好み焼き作りが行われた。実習生によってお好み焼きの作り方が実演され、グループでお好み焼きを作って試食した。また、お好み焼き作りだけではなく、広島市の紹介、広島弁などの紹介も行われた。2007 年度は調理実習室が使用できなかったため、アイスブレーキング活動を含めた自己紹介、実習生による日本のファッションや祭り、大学などの紹介、日語日文学科の学生による韓国の歌の紹介などを行った。2006 年度のお好み焼き作りも実際に目で見て作って食べられ好評であったが、2007 年度のように、日本側と韓国側、双方が文化紹介するというのも双方向の情報交換という意味で有意義な時間となった。

3．3　授業実践報告　～交流授業を中心に～

３．３では、授業実践報告として、仁濟大学校に来た日本人交換留学生に参加してもらっての交流授業を中心に述べる。

日本人留学生の授業へのかかわり方は大きく分けて２つある。１つは、通常の授業に入ってもらい、教科書の本文や例文を提示してもらったり、ペアワークやグループ活動の際の会話のパートナーになってもらったりする方法であり、もう１つの方法は、ゲストとして授業に参加してもらう方法である。ゲストとして参加してもらっての授業としては、2005 年度２学期はキャンパスとその周辺の紹介（2 年生）、釜山とその周辺の紹介（3 年生）、2007 年度１学期は韓国国内の旅行ツアーを企画しての発表などを行った。また、授業の内容に関連させ、異文化体験についてのインタビューセッション（3 年生）や期末試験として行った公開討論会（4 年生）の討議者として参加してもらった。３．２でも述べたが、本学は日本人留学生が少ないため、授業にゲストとして参加してもらう際は、1 対多人数のコミュニケーションにならざるを得ない。そのため、いくつかのグループに分かれ、テーマに基づいて何かを紹介するという形式を取ることが多い。このような紹介の形式で発表を行う際、学習者が難しい言葉や使い慣れていない言葉を使うため、説明がわかりにくくなる傾向にあり、わかりやすい発表にするための指導が今後の課題である。

【表 11】 2005 年度 2 学期の交流授業で扱われたテーマ例

『初級日本語会話Ⅱ』（2 年生対象） キャンパスとその周辺の紹介	『中級日本語会話Ⅱ』（3 年生対象） 釜山とその周辺の紹介
・大学にある食堂の比較 ・図書館の利用方法 ・おもしろいサークルと有名なサークル ・大学の近くにあるおいしいお店 ・金海テーマ旅行 ・「ツカレタキミ、イケ！～チムチルバン（찜질방）の紹介」 ・週末を 100％楽しむ方法	・領事館・本屋への行き方 ・釜山にあるおいしいお店 ・慶州・「仏国寺物語」の紹介 ・映画館と映画の紹介

2007 年度２学期の現在進行中の取り組みとして、比治山大学の学生とのブログによる交流がある。これは、仁濟大学校の『中級日本語会話Ⅱ』（3 年生対象）の授業の受講生と比治山大学の『CMC (Computer-Mediated Communication) Ⅱ』（国際コミュニケーションズ 3 年生対象）というコンピュータを介したコミュニケーション能力を鍛える授業の受講生

が 2〜5 人ぐらいのグループに分かれ、ブログに意見などを書き込み、国際交流を行うというものである。授業と関連したテーマで意見などを書き込むが、仁濟大学校の学生は日本語専攻のため、日本語の授業で提示されたテーマについて日本語で書き込み、それに対して比治山大学の学生は日本語で返事を書く。比治山大学の学生は、授業で提示されたテーマについて英語で書き込み、仁濟大学校の学生は英語で返事を書く。このような二言語による交流がどのように進むのか、またどのような効果があるのかについては、次稿に譲る。

3．4　日本語原語演劇・スピーチコンテストにおける指導

3．4では、日本語原語演劇とスピーチコンテストにおける指導について述べる。

日本語原語演劇とは、日本語のみを用いて行う演劇のことである。現在、日語日文学科所属のサークルは 3 つあり、そのうちの 1 つが日本語原語演劇を行っており、韓国人教員 1 名と日本人教員 1 名が指導している。韓国人教員がまず台本と俳優を選ぶ。台本は、日本の高校生用演劇などの出版された戯曲集から選んでいる。台本が決まると、日本人教員がテープに台本全体を録音し、学生は発音を聞き取り、漢字の読み方や意味などを把握する。その後、俳優たちによる読み合わせが行われる。読み合わせの際に、日本人教員が同席し、発音のおかしいところがあれば直す。なかなか発音が直らない場合には、アクセントの記号などを見せたり、教員と学生の発音を録音して違いを聞いたりするなど、個別指導を行う。俳優が台詞を覚えたら、実際のステージを念頭に動きを考えていく。舞台稽古には韓国人教員が立ち会い、演技指導や舞台での動き方などを念入りに指導する。練習期間は、約 2 ヶ月である。日本語原語演劇は、通常、秋の学術祭（学科やサークル単位で行われる普段の活動の成果を発表する行事で、大学祭より小規模のもの）で発表するが、在釜山日本国総領事館主催の演劇祭に出場する場合には、9 月の公演となる。領事館の演劇祭には 2005 年度と 2007 年度に出場し、2005 年度は最優秀賞を、2007 年度は優秀賞を受賞した。

日本語弁論大会も在釜山日本国総領事館の主催で行われるもので、嶺南地域（釜山、大邱、蔚山、慶南などを含む地域）にある大学の代表が 1 名ずつ出場する。日語日文学科では通常、9 月初めから中旬にかけて出場希望者を募り、9 月末ごろに予選大会を行う。発音や原稿内容などから出場者を選ぶ。出場者が決まったあとで、もう一度原稿を練り直し、発音指導に入る。第一段階として、原稿の暗記と同時に単音やアクセントの指導を行う。その後、ポーズの置き方、必要に応じてジェスチャーの指導などを行う。2001 年度、2002 年度、2004 年度には下関市長賞を、2006 年度には財団法人福岡交流協会賞を受賞した。

4　まとめ

本稿では、まず、漢字圏である日本・韓国・中国・台湾の大学用語について、制度が異なるにもかかわらず同じ漢字表記を使用するために生じる誤解や問題点を指摘するとともに、大学用語の日韓中台語彙対照研究の試みとして、授業に関わるもの、教育機関・教育課程に関わるもの、職階・身分に関わるものの３種に分けて表に示した。これは漢字圏の語彙対照研究の可能性と問題の所在を探ったものであり、今後更なる検討が必要である。

次に、山形大学の大学間協定校である仁濟大学校の側からの視点で捉えた日本の大学との国際交流について概観し、その現状と問題点について考察した。協定を締結するには様々な過程が存在するが、締結後、実際に学生を受け入れ、派遣するという段階に入ると実務的あるいは事務的な問題に直面する。たとえば「単位」と「学点」という語彙対照研究の視点による考察からは、定義や実際の運用、そして、その単位換算や成績認定の問題へと発展してゆく。後半では、交換留学や交流活動の現状と問題点を指摘し、日本語原語演劇とスピーチコンテストにおける指導について述べた。

今後、さらに国際交流の際に生じる問題の実例を収集し、その原因を分析し、解決策を検討することで、大きな混乱や誤解を回避し、より円滑な国際交流が行われることが望まれる。また、本稿で扱ったような学際的研究が増えることを期待したい。

（園田博文－山形大学）
（全成燁－仁濟大学校）
（国実久美子－仁濟大学校）
（百留康晴－文藻外語學院）
（百留恵美子－南臺科技大學）

An Analysis of the Problems of International Academic Exchange: The Case of Inje University in Korea

SONODA Hirofumi,
JEON SungYeub,
KUNIZANE Kumiko,
HYAKUTOME Yasuharu,
HYAKUTOME Emiko

This article addresses the misunderstandings and problems that can be caused by the use of similar Chinese characters standing for such things as positional titles, and the names of organizational subdivisions. The countries involved were Japan, Korea China and Taiwan. We attempt to compare these academic terms from the four countries by dividing them into three sub-groups: Terms related with classes and administration; terms related with academic department structure and curriculum; and terms between related with status and position. International academic exchanges make it necessary that the discrepancies in terminology be mapped. We suggest further study in this direction.

This article discusses the current situation, including the difficulties facing international academic exchanges from the point of view of Inje University, a sister university of Yamagata University. Even though it is a long process to become a sister university, there are additional practical problems in performing the administrative work of exchanging students. For example, the transfer of credits or grades between universities is made difficult by the differences in academic terms. It also requires the adoption of new guidelines in considering each university' s grading policies. In addition, this article examines the programs and activities related to international student exchanges and reports on the instruction of student theatrical activities and speech contests performed in the Japanese language.

We conclude that it is necessary to collect practical case studies and analyze the causes of misunderstandings in order to determine proper solutions and better facilitate international relations. Furthermore, it is necessary to increase and continue additional academic research in this area.